

# 方向

第一三四号 一九九一年八月二〇日

京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

女子 劍 舞

— 春夢女史周辺 三 —

1991.8.11 原田 憲雄

一八八八（明治二十一年）年、七月十一日、坪井すむ、桜井女学校小学高等科卒業（十五歳三ヶ月）《み》。同じ月、佐佐木信綱が十七歳で帝国大学古典科を卒業している《佐佐木幸綱『佐佐木信綱』》。信綱は神田小川町一番地に住んでいた。すむは夏休に信綱から和歌を学んだという《み》。あるいはこのころからであろうか。

一八八九年、四月、新海榮太郎（二六四一九）山梨英和女学校を創立、六月、甲府市の民家で開校《唐》。すむが後に勤務する学校である。七月一日、東海道線、新橋・神戸間全通。《森》によれば、この頃、新橋を發する下りの汽車は午前二回、午後二回あっただけで、そのうち二つは静岡と京都までしか行かない。午前六時十分発の列車は午後十一時二十分に京都に着く。十七時間余を要している。賃金は上等十一円二十八銭、中等七円五十二銭、下等三円七十六銭だった。

一八九〇（同二十三）年、三月二十五日、女子高等師範学校が設立され中村正直が校長となった。群馬県館林出身の実業家南条新六郎の長女サダが東京に来て神田小川町一番地に住み、御茶ノ水の女学校（女高師？）に入り、また佐佐木信綱に和歌を学ぶのは、この年からではないだろうか。サダ二十歳。

六月七日、坪井すむ、桜井女学校英語科卒業。英文証書署名者、Moria True Elizabeth Willken 矢嶋かじ

《み》。すむ、十八歳。七月、中野逍遙、第一高等中学校を卒業、九月、帝国大学文科大學漢文科に入学。教授は成斎・重野安綱、篁村・島田重礼だった。逍遙二十四歳。この年、椋井女学校と新栄女学校が合併し女子学院となった《唐》。この合併を《女》は「明治二十二年」のこととするが、同書の小倉文枝「バルケーン、マウン、ベスピヤス」には「明治二十三年九月十日」を合併の日としている。女子学院は麴町区上二番町の約二千坪に新築された。

このころ「王女会」が行われ始めた。浅田みか子「学窓回想記」《女》によると、ある米国婦人が、あちらの女学校には王女会というものがあって、学問や思想の向上を図るといったので、キリスト教系の女学校が連合して一年に一、二度ずつ文学会を開いた、という。いまでいう文化祭・学園祭のようなものであろう。「或る年女子学院で開催する番に当りました時に、……何か面白いことをして遠来の皆様を喜ばせようと思ひまして剣舞と詩踊とでもいうようなものを致しました。その剣舞の舞手は坪井、土屋、滝口氏等だったかと思ひます。大成さんが『力は山を抜き気は世を蓋う』と吟じ出すと後鉢巻白樺十字にあや取り、剣を腰に手挟んで三人踊り出でて舞い、『騷の行かざるは如何すべき』という時に、腰の剣を抜き放ちましたらば、傍に居た西洋人は『オム』と書いて後へ下がって大笑いでした。終つて廊下に飛び出したとき、開かれてあつた門前に多数の男学生が、あつけにとられて居られたには少なからず面喰らいました」。筆者の浅田みか子は旧姓滝口で、後に出る安田磐子とともに坪井すむの最も親しい友であり、文にいうように共に舞ったのだから、記事は細部まで事実に近いだろう。ところで中野逍遙に「女子剣舞、戯れに賦す」と題する詩がある《中》。

高歌朗吟抜劍斫疊而舞者誰子

鶉地傾天銀河墜

却怪木蘭是女郎

疾颯直自紅袖起

鬢髮如雲顏是花

七寶臺上月欲斜

忽認落々長松影

躡身欲斷坐隅蛇

憶昔粟津原頭春正月

桃花馬上人若雪

又憶城山酣戰秋方深

細柳營外裙似血

方今風化陷優柔

志氣銷亡淫氣浮

官府腐敗教海涸

落莫扶桑六十州

高歌朗吟劍を抜き疊を斫って而して舞う者は誰が子ぞ

鶉地に天を傾け銀河墜つ。

かえって怪しむ木蘭これ女郎かと、

疾颯ただちに紅袖より起こる。

鬢髮雲のごとく顔はこれ花、

七宝台上月斜めならんと欲す。

忽ち認む落々長松の影、

身を躍らせて断たんと欲す坐隅の蛇。

憶う昔粟津原頭春正月、

桃花馬上人雪のごとし。

また憶う城山酣戰秋まさに深く、

細柳營外裙血に似たり。

方今風化優柔に陥り、

志氣銷亡し淫氣浮かぶ。

官府腐敗し教海涸れ、

落莫たり扶桑六十州。

君不知聖天子明德在上

君知らずや聖天子の明德上にあり、

宜佐休光照九壤

よろしく休光をたすけて九壤を照らすべし。

懐百年英武精神

うらむらくは百年英武の精神、

不在鬢眉在釵裙

鬢眉にあらずして釵裙にあり。

これは、《中》外編の詩のなかでは終りに近いところに収められるためか、晩年の作と見る人もあるようだが、王女会であっけにとられた男学生のなかに逍遙がいて、これを作ったのではないか。《森》によれば、明治二十八年ごろ、女の剣舞が流行していたらしく、それを快からぬものと評した新聞のあったことを『女学雑誌』（同年六月二十八日）によって記している。逍遙の死後である。生前だとしても、すでに流行現象となったものにそれほど感興を覚えたかどうか。坪井すむ等の剣舞は、女子学院発足の一九〇〇年秋から翌年六月すむ卒業までの間のこと。まだきわめて珍しかったから、主催者の「面白いもの」という企画に合い、見物の男学生も「あっけにとられた」のであろう。「戯れに賦す」とは逍遙の照れかくしで、照れなければならぬほどに感動していたことは、詩の調子から察すべきである。『誰が罪』の岡野は、倭文子に初めて紹介された時からいって「去年頃」よく倭文子の兄の俊次を訪ねてきて、玄石にも会っている。逍遙もすむの兄春児と親しかったことは、逍遙のすむ宛の手紙に明らかである。王女会には、春児に誘われて同行したかもしれないが、たまたますむを女子学院を訪ねて王女会の当日にぶつかった、というようなことであったかもしれない。いずれにしても、この時期にかねが「女子剣舞」を見ていること、その女子が坪井すむ等であることに、不自然はない。

中野逍遙の手紙

(三)

—春夢女史周辺

四—

1901.6.12

原田憲雄

一八九一（明治二十四）年一月七日、坪井すむの祖父玄益は東京本所区石原町で急死した。七十九歳。『誰が罪』に描く藤井倭文子の祖父玄石の死と近い状況で、すむの兄の春児は、葬後に新宮に帰ったのであろう。六月三十日、すむは女子学院の日本中学科を卒業した《み》。たぶんすぐに新宮の蜂音庵のもとに帰ったのであろう。「十九日」という日付だけで確かなことはわからぬが、そのころから次の年にかけてのものと察せられるすむ宛て逍遙の手紙がある。

益々清寧に候

益（々々）御清寧  
御暮しなされ

めでたく存じ上候  
扱過般御

申越之儀に付  
二三人聞合

と云ふ何れも忙し由り

候処 何れも  
多忙之由にて  
相

對し一は取外しあり

断申候ゆゑ  
猶外に心当りの

向闌合候

向闌合候  
考に御座候

一週に一度或は  
二度位の文

一週に一度或は  
二度位の文

私方へ御越

章和歌ならば  
私方へ御越

知己の令状を呈

冊上を呈する

又別紙は呈する上

付身文を呈する

し又御入会  
御面倒と思召

被成ても 知己

の人にたのみ 点

刪乞ひ可申候はゞ

□□□ (いかが?)

又 別紙は

参考迄にさし上候

御望みならば御入会

可被成候

もし又御入会

御面倒と思召

候はゞ私  
 会員の名前を以  
 て此会に点刪  
 乞受ても  
 よろしく候  
 いづれにても  
 御都合次第  
 になさるべく候  
 子



又何なりともは用なきに

いふは遠なきに申す

いふは遠なきに申す

す

す

春夢子の君

又何なりとも

御用有之候は

御遠慮なく

御申越可被成候

先は用事のみ

右まで かしこ

十九日

重

春夢子の君

御もと

『誰が罪』第六回で、岡野が、卒業試験直前の倭文子を訪ねた時、帰国後も文章と和歌を勉強したいので指導者を紹介して欲しいと倭文子から岡野に頼んでいる。すむも逍遙に同様の依頼をし、それに対する返事である。この年の夏、逍遙は帰省せず文科大学の学寮にいて、八月は水戸に遊んでいる《中》。手紙は、夏休みが終り、帰ってきた学友たちに当たってみた上で書いたのであろうから、早ければ九月、おそくとも十月のものであろう。この手紙には、逍遙がすむに尽くそうとする心情がにじみ出ている、ほろりとさせられる。

帰国して半年ほどは、暖い家族のなかで楽しくとも、やがて飽満する。上の学科に進み、あるいは社会に出て活躍する同窓の噂を聞くと、じっとしておれない。そのころ京都市に住んでいた叔父坪井仙次郎方に寄宿するが、女子学院卒業では一般の学校の教師となる資格が足りないとしても聞かされ、文科大学に入れるものならと入学の手続きを尋ね、それに答えたのが「春夢子様御もと―中野逍遙の手紙(一)」（『方向』一二四）であろう。これは、そのとき推定したように一八九二（明治二十五）年二月か三月の「二十五日」付と考えてよからう。

ところでこの年の夏、逍遙が作った詩に「春夢女史に別る 二首」がある《中》。拙稿「春夢女史の文と南子の歌(二)」（『方向』一二〇）に引いたので省略するが、すむはこの年春以後のある時期に東京に行き、七月、新宮に帰ろうとし、逍遙がこれを送っているのである。東上は「東京に永住したい希望」《罪》の実現にむけ、上級学校への入学か、就職を、はかったのであろう。文科大学の駄目であることは逍遙の手紙で確かだ。あるいは女子高等師範学校を受験したのでは。いま一つは母校の女子学院に、就職先の斡旋を依頼したのでは。そうして受験は思う結果をえず、就職は時機待ち、というようなことにもなったのではなからうか。

歌人・大塚五朗

(二二五)

1991.6.25

原田憲雄

夕じめり

一九四〇年(つづき) 五朗、四十三歳。

『水鏡』昭和十五年四月号。

み冬疊り

池の水照り眉のあたりに及びゐて義満の像は寒く小さし(鹿苑院殿の像は小さし)  
午後二時といふに早くも夕じめり泛べて石はほのぼのとある

(庭元・金閣寺三首)  
(〃)

思ひがけざるに女(ひと)に逢ふことありて

きよらかにありへしからに十年へてまた逢ひ得しといひてさびしき

(庭二品・ある人に) (続風土八五)

冬の夜の素足を白くゐたまへば終に思ひの切なくなりぬ

山かげと日は青めきて一筋の道あり虹の如く通へり

別れ来てふとも心に沁むるもの冬の金魚をでばあとに見る

(庭二四)

街空に冬の虹たつあはれさのただそれだけをいひて別れぬ

(〃) ・水鏡なし)

デパートに冬の金魚を眺(み)てありぬ空しく女(ひと)を去らしめし昼(庭二〇五・〃)

この号の「京都支社二月歌会」報。二月十七日夜七時より京大楽友会館で。

孟宗のやぶにうすうすさす日さし春めくごとく見えてきびしき

木本美津子

ガード越ゆる燈ともす汽車は須臾なれど春のこころをかきたてらるる

平 二朗

しみ透る寒気はむしろ清々しポプラ並木に落つる星光

浅井 信子

涅槃絵のうなしたれるけだものにかまことはありてをろがみまつる

山本杜子郎

年あけて六つにはなれれおそうまれ描く絵いふ言幼しよ子は

大塚 五朗

自転車ふみて通りすぎゆく大手門さき警手みなくて心やすけし

前原 利男

梅が香がきこゆとばかり驚きつ半ばあげたる盲の能面 弱法師

高岡 歳子

『水鏡』同年五月号。

京都 御所 拝観 其他

黄に頭(た)ちて橋の実の豊けさや昼まだ浅く霜ざらふ苑(には)

冬さびし漢竹(かはたけ)の葉に通ふもの風は御苑(みには)の遼(ふか)きより来つ(庭空・京都御所)

よべの雪いまだ保てる呉竹の葉に添ふ光(かけ)はさやにゆれつつ (〃)

この苑(には) (その)の霜気ぐもりの(て)気遠さよ松吹く風は松を離れず (〃)

新墾(にひはり)の道のみとはしはるかにて玩具(おもちゃ)の如き電車よぎれり

『水鏡』同年六月号。

山 越 え

二月十八日、光田作治氏と洛東若王子より山科・犬津に山越えをなす

朝光のまだ整はぬ疎水べり白き家鴨の霜ふみて来ぬ

(庭へ・志賀の山越四首)

ところどころ青き空ありてこの朝を散り来る雪の地(つち)に届かぬ (//)

人とゐてしかもさびしき山ぐもり羊歯より羊歯に雪のしづるる (//)

空低く日のあることも寂(しづ)かにしてまな下に蒼き冬湖(ふゆうみ)のいろ (//)

谷かへて鳴くひよどりのこゑ澄むに昼の曇りの遂にはれ来ぬ

この号に、四月二十五日、大徳寺山内来光院での「山村徳太郎氏追悼京都歌会」報がある。出席者詠草。

きぞの夜その子を哭きしおんまみに触れてあやふく涙のみにき 大矢道之介

沈丁は夜の香に冷ゆれ白じろとさやるをよびを伝ひて滾れぬ 原田 憲雄

人の世のおくれ先だつ生き死にの無常の流れここに淀みぬ 竹内美津子

逝きましぬしかと思へどすこやけくいませし君がまざまざとあり 浅井 信子

愛でしもの桜花咲く日を近くその花にすら逢はで死なせし 前原 利男

人の死を聞くこと多しその中の一人に君もなり給ひけり 大塚 五朗

おくれ来て扇ばちくりさする癖の心忙しき君想ひ居る 山本杜子郎

よどみ深く春と大気はうごけるに年若くして君ゆかしめつ 光田 作治

人の計を聞きしといふにあらねども節電の街をゆきつつさびし 平 二朗

『水鏡』同年七月号。

若葉ぐもり

低き築地のむかふは椎の若葉にて真昼ぐもりの風しめりもつ

(庭八・嵯峨にて十首)

寛の水春は音に澄む祇王寺の昼のくもりを深く戸閉(とざ)せり

(統風土三〇一・嵯峨野)

埃づきし己がひたひを手になでつ別れし女(ひと)の顔をさびしむ

吹く風の(も)若葉じめりてひそかなり春は伐るべくなりし竹やぶ

(庭六・統風土五七)

冷え来つつなほ夕光を保(も)つ池の寂しさいひて女(ひと)は坐りぬ(〃)

昼の空にあはれなる月のあるいひて別れねばならぬしばらくを居る

『水鏡』同年八月号。

四国の旅

朝の光やがてあまねくなりゆけば山より鳥の磯に来て鳴く 室戸岬

(庭九・統風土三四)

岩間(いはあひ)に引き残りたる海水(みづ)浅し朝光(あさかげ)をぬひて泳ぐ魚あり (〃・〃)

日埃の時に舞ひ立つさびしさを目には見てあつひとりなる旅 (庭九・〃)

遠景に城ある街のやさしさを汽車よりわれの降りたちてみつ 松山 (庭九・〃)

朝よりの晴れは夏めく公園のふかみにありてぶらんこの音 (庭九・〃)

この旅は五月下旬の公務出張で、原田宛葉書によると高松・室戸岬・高知・屋島・松山・広島・姫路を巡った。

早朝の観蓮会が始められて、今年で何回目だろうか、毎年、行ってみたいと思いつながら法金剛院の門を入ったことがなかった。

七月二十日から八月四日までということだったが、八月三日の午後になってから行った。大覚寺行きバスに乗って花園駅前で降り、バス通りに面した表門に入る。蓮はもうほとんど咲き終つただろうと思いつながら、中門を通つて敷石づたいに行くと、両側に鉢が並び、人の背丈を越えるほどの蓮の葉が重なつて広がっている。間にピンクや白の花が透きとおるように輝いて咲いている。閉じて宝珠のような形のものも、実になつて伸び上がっているものもある。先客の三人連れが立ち去ると、広い庭にわたしだけになった。すぐ外は自動車道路だけれど、セミの声だけが聞こえて、夏の午後は夢のように静かだった。

蓮の間を通り抜けると広い池に出る。池の中にも蓮が咲いていたが、そちらは遠くで、花は少ないようだった。花の盛りには遅すぎたけれど、代りにこの静けさがあつた。池の水は白っぽく見え、少なくともある水の中を小柄な鯉が通つて行く。池の中には島が二つあり、橋で続いているらしい。まわりにはたくさんの種類の木が茂つている。池に面して礼堂があり、その前にはもみじの木、軒下の溝には濃い紫のヤブランが目についた。こんなに広い庭がとても大切に手入れされている。法金剛院は古い歴史をもっているが、現在は、奈良の唐招提寺を本山とする律宗の寺である。

靴を脱いで礼堂の階段を上がり、見上げると、入り口に「法金剛院」と書いた大きい古い額が掲げられていた。昭和四十三年に寺の前の丸太町通りが広げられて、バスが通るようになった時に、仏殿と礼堂は移築され、仏殿は鉄筋に、礼堂もかなりの部分が新しくなったのだそうである。表門も中の門も、道を広げただけ、中へ引込んで、寺域はかなり削られたことになる。礼堂は、仏殿の阿弥陀如来を礼拝する所であるが、今日は仏殿の側の戸は閉じられて、まわりに、蓮の写真がたくさん展示されていた。蓮の花を早朝に觀賞する会を始められたのは、現在のこの寺の和上（わじょう）さんであるが、その会に撮影した人が寄贈されたものばかりで、蓮の種類名と撮影者の氏名が記入されていた。市内の人もあれば、遠くから来た市外の人もある。わたしはほとんど花の咲きおわった時に来たので、このようにいろいろな花を見ることはできなかったが、『法金剛院の蓮』という印刷物の説明によれば、極楽浄土に、青・黄・赤・白の大きな蓮が咲いていると、阿弥陀経に説かれているので、この四色の蓮を集めようと、あちこち訪ねまわっているうちに、愛好者が、仏前への供養にと献上されたものが、五十余種になったと書かれている。わたしなどにはとてもそれだけの種類の見分けはつかない。

写真で見ると、「大賀蓮」は大賀博士が泥炭層から発掘されたというものでピンク、西円寺青蓮が青、アメリカ黄蓮が黄、即非蓮が赤、不忍斑蓮は白くて、花弁の先のほうにピンクの斑が入っている。これなどが四色を表しているのだろうか。花の咲き誇っている頃に來たらどんなに見事だったことかと思う。なお、蓮の咲き方は、散るまでに毎日、変わるのだそうで、第一日めは午前四時からトックリ型に咲き、午前九時頃から閉じる。翌日は同じ頃に茶碗型まで開き、また九時頃から閉じる。三日めは皿型に開き、ほぼ一日中開いており、四日から五



日めにかけて散るそうである。わたしどもでも何年間か蓮を咲かせたことがあったが、このように咲いていることに気付かなかった。蓮を育てるには、水田の泥や池の底に沈殿した泥のように、粒子のこまかい土が必要なので大変に手がかかる。和上さんのお骨折りはたいへんだらうと思う。

夏たけて堀のはちすの花みつつほとけのをしへ思ふ朝かな

昭和六十三年七月

が昭和天皇のご辞世の歌だそうである。泥から抜け出た蓮の清らかさは、いつも仏心の象徴とされる。

礼堂から廊下を廻って、渡り廊下を通り。仏殿に入る。いきなり正面の大きな阿弥陀如来に迎えられて、思わず床に頭をつけて深くお礼をした。なんとやさしく、美しく、穏やかでその上に威厳のあるお顔だらう。ここで阿弥陀如来にお話していれば、少しづつ何かがわかってきそうな安心を感じる。わたし達はなんと不安定で、こまごまとしたことに煩って生きていることかと思えてくる。しかし、現実にもどって考えてみると、その煩わしさを疎かにしては、大きな事もあり得ないということに気づく。「やっぱり人間は迷いながら生きて行くより仕方ないのでしょうか、どうか少しでも正しい道をお示してください。わたくし達をお守りください」。

阿弥陀如来は、一切の煩惱をもった人たちを救済しようという誓願をたてて修行し、完全な悟りに達した仏様で、西方極楽浄土で、いまも法を説いておられるという。悩みや苦しみや恐れを強く感じていた平安貴族に、特に信仰されたので、立派な仏像がたくさん造られている。

法金剛院の阿弥陀如来は鳥羽天皇の皇后待賢門院の御願によって大治五年(二三〇)仏師院覚の手で彫られたものだという。平等院の阿弥陀如來像とよく似ているが、その仏師定朝が亡くなって七十年ほど後だそうで、如来彫

刻では平等院を模範とした時代だという。

誰も入ってくる人がなく、仏殿の中は夏の日盛りにかかわらず、どこからか涼しい風が吹いてくる。お供えに生けられた菊が美しかった。阿弥陀如来の脇侍は観音菩薩と勢至菩薩と思っているが、この仏殿は、地藏菩薩と不動明王である。観音菩薩が蓮台を捧げて、浄土へと迎えに来てくださる図などをよく見るが、ここではだいたい雰囲気が違っている。阿弥陀如来と不動明王は藤原時代の作、地藏菩薩は平安初期の一木造りだというから、もとは別のものだったのかも知れない。

法金剛院は、双ヶ岡のすぐ東南にあり、平安初期、天長七年(八三〇)に右大臣清原夏野の双丘山荘として開かれた所だと言う。桜、もみじ、菊などを中心に、花を多く植えていたので、地名もそのまま花園と呼んでいる。嵯峨・淳和・仁明の諸帝がよく行幸され、なかでも仁明天皇は、この山荘の内山の眺めを愛で、従五位下を授けられたので、この山を五位山と呼ぶようになった。承和四年(八三三)に夏野が亡くなって、山荘は双丘寺(ならびがおかでら)となった。その後、天安二年(八五六)文徳天皇がここに伽藍を建て、定額寺に列せられ天安寺と呼ばれた。天皇がその年に崩じたので、天安寺は衰えていったが、平安末期の大治四年(一一三三)から翌五年にかけて、待賢門院によって復興され、法金剛院と呼ぶようになった。待賢門院璋子(一一〇一—一一一〇)は、崇徳・後白河両天皇の生母である。藤原公実の娘だが、白河法皇の養女として育てられ、法皇の孫にあたる鳥羽天皇の女御として入内、翌年、中宮となった。たいへん美しく魅力的な女性だったといわれている。入内の翌年に生まれたのが崇徳だが、実は白河法皇の子であるという。璋子は白河と鳥羽との間にあって苦しんだようである。他に五人の親王と二人

の皇女の名が見えるが、はっきり記録されるのは後白河天皇と統子内親王だけ。鳥羽天皇の生母は璋子の父の妹である。

白河法皇の強制によって四歳の崇徳が即位したが、法皇が亡くなって後、鳥羽上皇の意思で、美福門院得子の腹の近衛が三歳で即位するという目まぐるしさである。そのとき崇徳天皇は十八歳だったことになる。その三か月後に待賢門院は落飾し、三年後に四十五歳で亡くなった。法金剛院の阿弥陀堂が上棟される前年に白河法皇が亡くなっているが、待賢門院は法皇と天皇との争いの中でこの世を厭い、阿弥陀浄土を求められたのだろうといわれる。近衛天皇は十七歳で亡くなったが、生母の美福門院もその五年後に四十四歳で亡くなっている。どちらの皇后も心安らかな日々ではなかったはずである。

法金剛院の古図の写真をみると、北に五位山を背にして、ふもとの青女の滝から流れ出る川が、庭を東西に分けて池に流れ込む。境内にはたくさんの御堂が建って、東御堂・護摩堂・観音堂・一切経蔵・阿弥陀堂・南御堂・三重の塔・北斗堂・地藏堂などが見られ、広大な寺院である。待賢門院が亡くなってからも、統子内親王や後白河天皇が御堂を建てておられるから、後の時代の図なのかもしれない。

その後、鎌倉時代になって、衰えていたこの寺に、唐招提寺から円覚十万上人が入って復興されたが、室町時代と天正・慶長の震災ですっかり焼失した。元和三年(一六三三)に、唐招提寺・泉涌寺の長老であった照珍和尚(しゅうちんわじょう)によって礼堂・経蔵が建てられた。昭和に入って唐招提寺長老の北川智海和尚がこの寺の住職を兼任し、十年代には学生だった赤谷明海先生が副住職として寺史の調査や境内の整備に当たられ、友人であっ

た人々もよくこの寺を訪ねたと聞いている。世界大戦の始まるすこし前である。昭和四十三年に丸太町通りが広げられる際、御堂が移築、修復された。庭もこのとき発掘され、青女の滝はもとの形になり、池も広くなっている。今の法金剛院は、戦前とはすっかり変わっているということである。

寺の歴史を見ると、待賢門院も統子内親王も五位山に葬られたとあるが、その陵墓はどこにあるのだろうか。庭から内山の方へすこし上がってのぞいてみると、山の中はきれいに下刈りされ、奥のほうに寺の歴代さんの墓らしいものなどが見える。深い山になっていて、踏み分け道のようなのが細々と続いているのを見てみると、ふと遠い昔の風景の中にいるような気分になる。登ってはいけない所らしかかったのでそっと引き返した。

家に帰ってからたずねてみると、陵墓は他の入り口から行くようになっていて、宮内庁が管理しているはずだという。別の日に自転車で行ってみた。妙心寺の門の前を通過して、五位山の裏になると思われる道に入る。山の下に家が並んでいて、道は乗用車がやっと通れるほどの広さがある。まっすぐ行くと双ヶ岡に突き当たったので、引き返しながら家の間から山を見てみると、立て札のあるのが見えた。入って行くとそこが待賢門院の墓だった。よく掃除された黒松の林の中の山砂の道を、蛇行しながらゆるい坂道が上っている。歩いて行くとすぐであった。中央によく茂った黒松が立ち、脇にも二本ほど茂っている。奥のほうで誰かが草を焼いているような煙が登ってきて墓を包んでいた。後は山になっていて行き止まりである。全体としては、かなり広い陵墓だった。黒っぽい山砂と茂った黒松と刈り込まれたヒサカキと赤く枯れた杉苔が目につく。夏の午後だから、重苦しいような感じのするのは仕方がない。時々セミの声が聞こえる。坂を下りてくると木の間から自動車の並んだガレージが見え

た。人の声は聞こえない。

双ヶ岡の下の道をくだって丸太町通りへ出たが、内親王の墓がわからなかった。法金剛院へ行つてたずねてみると、JR花園駅の前を北に行くと今宮神社の前になると教えられた。寺の前を東へ行き、駅前通りを北に進むと、地形から言つて、山を掘り割つたような感じの登り坂があり、途中に小さな神社と向かい合つて、丘の上に統子内親王の墓があつた。急な石段を登ると西陽がまともに当たつてまぶしい。この辺りはいっばいに家が建つて、後のほうにも家が見える。五位山に人々の家が漫食したような感じである。陵墓は低い庭木ふうのものが植えられているだけで、あまりにも明るく、小さな木蔭さえなかつた。春なら何かの花でも咲いてしつとりしているのかもしれない。

石段を下りて、神社との間を上ると、先に通つていった裏側の道へ出た。法金剛院をひとまわりしてきたことになる。帰る方向へ走るとすぐ妙心寺である。寺では精霊迎えの読経の音が響き、露店がたくさん出ている。門の前には「アイスクリン」と書いた店があつた。おそらく法金剛院の庭は、このあたり妙心寺と隣りあう所まで広がっていたのではないかと想像する。

阿弥陀浄土を求めた待賢門院の心をおしはかつて、法金剛院の和上さんは、あれほど熱心に四色の蓮を咲かせておられるのだらう。待賢門院の時代の不自由さからすれば、いろいろ不都合は多くても、わたしなどが、生きて阿弥陀如来を拝み、極楽浄土を経験できるのだから、ずいぶん幸せな世の中なのだと思う。その気持になりさえすれば、誰にも法金剛院の門は開かれているからである。

4-13. さて、世尊よ、その長者は、あの貧しい男を「息子」と呼び、貧しい男もその長者の傍にいて、「父」と見なすようになります。このようにして世尊よ、長者は、息子への愛に渴える二十年間、その息子に汲み取りをさせます。さて二十年たって、あの貧しい男は、長者の屋敷に、ためらわずに出入りするようになります。しかしやはり、藁小屋に寝泊まりしているのです。

atha khalu bhagavan sa grha-patis tasya daridra-purusasya (w: ) putra iti nama kuryat  
 sa ca daridra-purusas tasya grha-pater antike pitr-samjñam utpādayet / anena bhagavan paryāyena  
 sa grha-patih putra-kama-īṣṭito vimśati-varṣāni tam putram saṅkaśā dhanam śodhāpayet / atha  
 vimśater varṣānam atyayena sa daridra-purusas tasya grha-pater bhavanane viśrabdho bhaven nis-  
 kramaṇa-praveśe tetraiva ca katapali-kūncikayam vāsam kalpayet //

4-14. さて、世尊よ、その長者は、衰えて、死ぬ時が近づいたことを認め、あの貧しい男にこのように言います  
 「さあ、ここへおいで、お前さん、おれにはこのたくさんの黄金・財産・穀物・土蔵・穀倉があるが、おれは病気が重い、これらをだれに与え、だれからうけとり、なにを保存すべきかを、お前さんに一切知ってほしいのだ。なぜなら、この財宝は、何であれおれが所有者なんだが、お前さんのものでもあるのだ。お前さんは、おれの損失になるようなことはいかなることも、あらせてはならぬ」

atha khalu bhagavams tasya grha-pater glānyam pratyupasthitam bhavet sa maraṇa-kāla-samayam c  
ātmanah pratyupasthitam samanupāśyet / sa tam daridra-puruṣam evam vadet / āgaccha tvam bhoh  
puruṣa / idam mama prabhūtam hiraṇya-suvarṇa-dhāna-kōśa-koghāgarām asty aham bādha-  
glāna icchāmy etam yasya dātavyam yataś ca brahṇītyam yac ca nidhātavyam bhavet / (W: ) sarvam  
samjāniyāh / tat kasya hetoh / yādṛśa evāham asya dravyasya svāmi tadṛśas tvam api mā ca me  
tvam kim-cid ato vipraṇāśayisyasi //

4-15. ちて、世尊よ、その貧しい男はこのようにして、あの長者の多くの黄金・財産・穀物・土蔵・穀倉のことを知るようになるが、自分はそれらに欲もなく、その中から何も、わずかに一ブラスタほどの麦粉の代金を求めようとせず、草ぶきの小屋を住まいとして、自分は貧しいと思います。

atha khalu bhagavan sa daridra-puruṣo nena paryāyeṇa tac ca tasya grha-pateḥ prabhūtam hiraṇya-  
-suvarṇa-dhāna-dhānya-kōśa-koghāgarām samjāniyād ātmanā ca tato nihśpṛho bhaven na ca tasmāt  
kim-cit prāthayed antaśah saktu-prastha-mūlya-mātram api tattraiva ca katapali-kuñcikāyam vas-  
am kalpayet tam eva daridra-cintam anuvicintayamānah //

4-16. ちて、世尊よ、その長者は、あの息子が有能な管理者として十分に成熟したことを知り、すぐれた知識で心が磨かれたが、また以前の貧しさを卑下し、がっかりし、嫌悪しているのを知り、おのれの死ぬ時が近づいたのを認め、その貧しい男を呼び寄せ、たくさんの親族の会衆に示し、王や、大臣や、都会の人、地

方の人の前で、このように告げます。

「お聞きください、皆さん。これはわたしの実の息子、わたしが生んだ者です。なにがしという村があり、そこからかれは、五十年前にいなくなったのです。これの名はなにがし、わたしもなにがしという名です。これを捜しながら、わたしはその村からここへ来ました。これはわたしの息子、わたしはこれの父親です。わたしの持っているものは、何もかもすべて、わたしはこの男に譲ります。わたしじしんの財産については、何もかもすべて、この男が知っています」

atha khalu bhagavan sa gr̥ha-pālis tam putram śaktam paripalakam paripakvam viditva 'vamarḍita-  
cittam udāra-samīhaya ca paurvikaya daridra-cintaya rtiyantam jehriyamānam jugupsamānam vidit-  
vā merāṇa-kāla-samaye pratyupasthite tam daridra-purusam ānāyya mahato jñāti-samghasyopanāmay-  
itvā rājno va rāja-mātrasya va purato naigama-jānapadanam ca samukham evam samgrāvayet/ śrīv-  
antu dhavanto 'yam mama putra auraso mayaiiva janitah / amukam nāma nagaram tasmād esa pañcāśad  
varṣo naṣṭah / amuko nāmāisa nāmnā 'ham apy amuko nāma/ tatas cāham nāgarād etam eva mārgamāṇa  
ih āgatah / esa mama pulro 'ham asya pita / yah kās-cin mamopadhogo 'sti tam sarvam asmai pur-  
uṣāya niryatayami yac ca me kiṃ-cid asti pratyātmakam dhanam tat sarvam esa eva janāti ||

この長者の言葉を妙本は「諸君当知。此是我子。我之所生。於某城中。捨吾逃走。伶傳辛苦。五十余年。……」  
と訳する。「伶傳辛苦」にあたる言葉は梵本にはないが、經意を梵本以上に表現し、実にすぐれた翻訳である。